

<研究ノート>

第一次世界戦争とヒルファディング

—— ベルリン時代 ——

倉 田 稔

本稿はヒルファディング (1877~1941) のライフ・ヒストリーの一部分である。⁽¹⁾

1

20世紀初頭のヨーロッパは、帝国主義戦争の危機をはらんでいた。サラエヴォ事件 (1914年) は、セルビアとオーストリア・ハンガリーの軍事的対立を呼び、後者をあと押ししたドイツは、協商国陣営と交戦を開始し、第一次世界戦争が勃発した。

ドイツ政府は、戦争の開始とともに、50億マルクの戦争公債を発行しようと欲した。帝国議会は、予算審議権⁽²⁾をもっているので、8月4日にこの法案が議会上程されることになった。この日の帝国議会で、平和主義勢力で革命的政党と考えられたドイツ社会民主党 (SPD) は、戦債を承認してしまったのである。国際社会主義運動としては、取り返しのつかない失敗であっ

原稿受領 1976年9月6日

(1) ヒルファディングの評伝として、次の拙稿をこの順序で読んでいただければ幸いである。

- i 「若きヒルファディング」 (『季刊社会思想』1973年、第3巻2号)。
- ii 「ドイツ社会民主党とストライキ論争」 (『労働運動史研究』第59号、労働旬報社、1976年) 所収。
- iii 「ヒルファディングと『金融資本論』の時代」 (『歴史学研究』第418号、1975年3月)。
- iv 本稿。

(2) 軍事・外交は、ドイツ皇帝の権限である。

た。

ここで、第1次世界戦争直前のSPDの勢力・組織を簡単に要約しておこう。

SPDの黨員数は、1906年6月30日にはじめて正確な数が告げられた。38万4,327人。1907年7月終わりには、53万466人に成長し、そのうち1万900人が婦人であった。⁽³⁾ 1913年9月には98万2,850人になっていた。帝国議会に、SPD代表は、1903年に81議席、1907年に43議席確保しており、1912年には425万票を獲得し、110議席の最大政党となった。総得票の4分の1であり、全議席の4分1を少し上回った。

さて、党内は、次の分派にわかれていた。

1. 極端左派（彼らは、帝国議会にK・リープクネヒトを送っていた。文筆上では、F・メーリング、R・ルクセンブルグ、K・ツェトキーンらが代表していた。）

2. 左派（議会に、H・ハーゼ、レーデブーアらが出ており、文筆上では、K・カウツキー、H・クローネ、らが代表した。なお、1910年頃から中央派と言われるようになり、ヒルファディングはもちろんこの派に属した）。

3. 右派（シャイデマン、R・フィッシャーに代表される）。

4. 修正主義派（E・ベルンシュタイン、E・ダヴィド、L・フランクラが代表的）。

5. 帝国主義的社会主義者（コルプ・フォン・バーデン、Dr. クヴェッセル、E・フィッシャー、W・ハイネらが代表的。彼らは、陸・海軍の増大、植民地の拡張、保護主義、の支持者であった。⁽⁵⁾）

以上のうち、最大派閥は右派であり、次に左派である。左派は、極端左派⁽⁶⁾

(3) Franz Osterroth/ Dieter Schuster, *Chronik der deutschen Sozialdemokratie*. Hannover 1963.

(4) Chronik, *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*. I. Berlin 1965.
村瀬興雄『ドイツ現代史』東大出版、1965年。

(5) Edwin Bevan, *German Socialdemocracy during the war*, London 1918.

(6) Evelyn Anderson, *Hammer or Anvil. The Story of the German Working-Class Movement*. London 1945.

を含めても、党内で少数派であった。なお修正派は、右派と区別をしたほうがより正確である。広い意味での右派は、(3)(4)(5)が含まれる。同様に、広い意味での左派は、(1)(2)が含まれる。

SPDは、ドイツ帝国の各州にそれ自身のSPD組織をもっていた。それぞれの地方(=州)組織は、規約により、年1回の党大会 Parteitag に代表を送った。なお、帝国議会の党議員(団)は、党大会に公式に出席した。党大会の一つの任務は、党首 Präsident 1名、副党首 1名、財務 1名、書記 6名、助手 2名、および9名からなる統制委員会 Kontroll kommission を選出することであった。これが、党幹部会 Vorstand をなし、地方組織代表者からなる党委員会 Ausschuß がこれを補佐した。党首は、もちろん、SPDの生みの親、最高の実力者、A・ベーベルがひきつづき選ばれ、その任にあたった。おそらく太陽が西から昇ることはあっても、ベーベルが党首に選ばれないことはなかったが、彼は1913年8月13日に病没した。そのために1913年9月(Jena)党大会では、新しい党首を選ばねばならなかった。この党大会は一つのことを象徴した。というのは、規約と異なり2人の党首が選ばれた。左派からH・ハーゼ、右派からF・エーベルト、この2人が共同党首となった。この事件は、第1に、この時期には左派と右派の統一がかなり難しいこと、第2に、ベーベルのようなカリスマ的人物のみが、唯一人の党代表になりえていたことを、示すものであった。ハーゼは、帝国議会議員団の代表になった。1913年の戦前最後の党大会で、党幹部会には、この二人以外に、バルテル、O・ブラウン、ゲリッシュ、モルケンブール、H・ミュラー、プファンクッフ、シャイデマン、ウェルズ、ヴェンゲルス、ツィーツ、そして統制委員会として、ボック、ブリューネ、エルンスト、ゲック、ガイヤー、ヘングスバハ、シュトウッペ、ティム、C・ツェトキーン、が選出された。

党は、多くの新聞・雑誌を発行していた。日刊新聞は90紙を数えた。中央機関紙は『フォルヴェルツ』、これは同時にベルリン支部の機関紙でもあった。地方新聞で著名なものは、『ハンブルガー・エコー』『ヘムニッツァー・フォルクスシュティメ』『カールスルーエル・フォルクスフロイント』『ブレ

スラウエル・フォルクスヴァハト』『ミュンヒナー・ポスト』『ライプチガー・フォルクスシュティメ』であり、有名な理論誌は、左派の週刊『ノイエ・ツァイト』（カウツキー、クーノー編集）、主に修正派の『ゾシァリスティッシェ・モナーツヘフテ』であり、後者にはベルンシュタインや、実際は社会主義者には数えられない経済学者マックス・シッペルらの論文が多く寄稿されていた。

党外の組織としては、SPDの指導と影響下にある「自由労働組合」をあげねばならない。これは1914年に250万人の組合員を擁していた。この最上部は、総務委員会 General kommission であるが、右派の支配下にあった。

SPD内には右派と左派との亀裂を内蔵していた。亀裂を深めたのは、戦争の勃発であった。

2

SPDの帝国議会議員団は、政府の案件、戦債問題を承認すべきか否かの厳しい選択に迫られた。8月3日同議員団は、はげしい討論の後採決をした。戦債に承認78票、反対14票⁽⁷⁾で、賛成することにきまった。さて反対派は、翌4日にどんな態度をとるべきか迷った。あくまでも戦債に反対し、すなわち党の決定に背き、党の分裂へと歩むか、どうか。しかし、彼らは、党の統一こそ重大であると考えてしぶしぶ、戦債を承認した。

皮肉なことに、左派=反対側党に属したH・ハーゼが議員団長であったので、彼自身が、8月4日帝国議会で、戦争公債を承認する⁽⁸⁾声明を読み上げたのである。

(7) この反対票は、アルブレヒト、アントリック、ボック、ガイヤー、ハーゼ、ヘンケ、ヘルツフェルト、クーネルト、レーデブーア、レンシュ、リープクネヒト、パイローテス、リュール、フォークトヘル。

(8) Erklärung Haases im Namen der SPD-Fraktion zur Bewilligung der Kriegskredite in der Reichstagsitzung vom 4. August 1914. in: *Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*. Reihe II. Bd. 1. 1914-1917, Berlin 1958, S. 22-23.

この日をもってSPDは、もう後もどりできぬ道、戦争への道を歩みはじめた。同日すでに、ドイツ軍は、中立国ベルギーを侵犯し、かの地を軍靴で踏みにじっていた。一方、最左翼のひとびとはローザ・ルクセンブルグの家に集まり、革命的な課題について協議した。

8月6日に、SPD幹部会とドイツ労働組合総務委員会⁽⁹⁾は共同で声明を発して、党と労働組合とが戦争を支持するよう呼びかけた。

党・労働組合・議員団は一致して戦争協力の側に回ってしまった。しかし、これらに対して、党内では、極端左派の人々だけではなく、左派（中央派）の人々も、その平和主義的信念から反対の声をあげた。少なからぬ地方新聞とともに、中央紙『フォルヴェルツ』も左派系の人々の手にあった。同紙編集局員の多くは、8月3日に帝国議会議員団が戦債承認の決議を採択した直後、次の様な声明を党幹部会あてに送った。

「社会民主党帝国議会議員団は、昨日議員団会議で14票の反対にたいして決議を受入れたあと、今日は政府の戦争公債の発行に賛成した。銀行—铸貨立法の変更や、貨付金庫法、また手形や小切手の支払期限延長にかんする法案ばかりではなく、政府の戦争遂行目的に必要な50億〔マルク〕債にたいしても賛成したのだ。この態度は、ひとたび宣戦布告がなされたあとでは、⁽¹⁰⁾もう戦争に賛成か反対かの決断ではなくて、国土の擁護に必要な手段の問題が、今や問題なのだ、ということに基づいている。”

われわれは、わが党の今の危険な状態とわれわれの新聞の維持とを専ら考慮し、『フォルヴェルツ』でこの戦債要求に賛成したことを公表して批判しようとはしないが、われわれは党幹部会と新聞委員会にたいし、こう言わざるをえない。議員団の態度は首尾一貫せず、その結果は党を恥ずかしめるものとする。

(9) Erklärung des Vorstandes der SPD und der Generalkommission der Gewerkschaften Deutschlands vom 6. August 1914 über die Aufgaben der Partei- und der Gewerkschaftsmitglieder während des Krieges. in: op. cit., S. 26-27.

(10) 8月3日に、ドイツはフランスに宣戦布告した。

帝国議員団が50億〔マルク〕公債の賛成を動機づけた同種の議論によって、ほとんどあらゆる軍事要求は根拠づけられてしまうであろう。ひとたび他の諸政党が、新しい軍隊、軍艦の増強に賛成してしまえば、もはやその増強は変更せず、祖国の保全と部隊の独自利益が無条件に要求され、それらは可能なかぎり武装され、軍服、銃、大砲等々が敵にたいして不十分であれば派兵できない、と、いつでもいわれるだろう。これに賛成したことは、インタナショナルへの痛撃を意味し、国際労働者運動の諸部門の関係を弛緩させ、この運動の内部でドイツ社会民主党の地位を恥ずかしめることになる。とりわけ戦債の賛成によって、ドイツ社会民主党が議員団声明の結果を拒否しても、戦争とそこから生ずる結果にたいして、一定の共同責任を、将来厳しい復しゅうとなる責任を、引き受けるのである。

ベルリン、1914年8月4日

『フォルヴェルツ』編集局

クローネー、ヒルファディング、ライト、
 ヨーン、ドイミヒ、シュトゥレーベル、
 ヴェーバー、ヴェルムート、ショルツ、⁽¹¹⁾

(傍点は、原文隔字体)

この声明は、戦争中公表されなかった。もちろん、党幹部会はこのようなものを公表する気はなかったし、これら編集局員たちも党幹部会に送っただけで、公表の希望があったかどうか疑わしい。文中にある、議員団の態度を『フォルヴェルツ』で公表して批判する積りはない、というのは、これほど重要な問題にたいして、相当弱腰であったことを示している。是が非でも『フォルヴェルツ』の存続を計った結果であろう。署名者の1人にヒルファディングがいる。かれらは編集局員のすべてではなかったにしても、『フォルヴェルツ』のある傾向を見出すには足りるであろう。これを起草したといわれるハインリヒ・クローネーは、まもなく社会愛国者になり、その熱心な代

(11) Eugen Prager, *Geschichte der USPD*. 2. Aufl. Berlin 1922, S. 30-31.

(12) *Ibid.*, S. 34.

弁者の1人となった。

そのほか、戦争反対の声をあげたのは、クリスピエン、ヴェストマイヤー、クララ・ツェトキーンを頂点とする、ヴェルテンベルグの黨員たちであり、機関紙としては、『ライプチガー・フォルクスツァイトゥング』、『ブレーマー・ビュルガーツァイトゥング』、『フォルクスブラット』(ハレ)、『シュヴァービシェ・タークヴァハ』などであつた。

ヒルファディングが一編集局員であつた『フォルヴェルツ』は、中央紙でもあり、党幹部会はこれに注意していた。ベルリンの党組織は、全体として『フォルヴェルツ』編集局員の戦争反対政策を支持した。⁽¹³⁾ 党幹部会は、『フォルヴェルツ』の態度を屈服させようと考えはじめるが、それが成功するのは、1年の後であつた。『フォルヴェルツ』は、党幹部会多数派の政策に反対して、どんな愛国的宣伝をも控えていたが、1919年9月21日にはすでに、検閲庁の禁止する従軍記事掲載のかどで、3日間の発禁を命ぜられた。そして再刊を許されたかと思うと、マルク地方の司令官フォン・ケッセル元帥は、今度はあらたに、「おつて沙汰あるまで」発禁処分にし、1914年9月30日になってようやく今度は、戦争勃発にともなつてあらわれてきたドイツ国民の一致団結を考え、『フォルヴェルツ』において「階級憎悪」や「階級闘争」というテーマにもはやふれてはならないという条件づきで、処分をといたのである。⁽¹⁴⁾ 『フォルヴェルツ』の発行は2度中止されたが、そのたびに党幹部会は、帝国内務省にとりなしをし、⁽¹⁵⁾ 上記の条件を約束に許可を得た。「SPD幹部会および党委員会も、『フォルヴェルツ』編集局の活動を批判した。」⁽¹⁶⁾ 編集部の中かで党幹部会を代表していたヘルマン・ミュラーは、同様に同紙を批判した。⁽¹⁷⁾

(13) C. E. Schorske, *German Social Democracy 1905-1917*. New York 1965. p. 296.

(14) Wilfried Gottschalch, *Strukturveränderungen der Gesellschaft und des Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding*. Berlin 1962. S. 17.

保住・西尾訳『ヒルファディング』ミネルヴァ書房、1973年、5ページ。

(15) Schorske, op. cit.

(16) Gottschalch, op. cit., 訳, 5ページ。

(17) Ibid. 訳, 5~6ページ。

党幹部会多数派と並んでドイツ労働組合総務委員会は、愛国主義的グループであった。たしかに総務委員会は、戦争勃発までは、あたかも党政治上は中立であるかのような外観をもっていた。しかし今では、総務委員会と諸労働組合執行部の多数派は、階級闘争を放棄していた。それゆえ彼らにとっては、『フォルヴェルツ』の態度は怖れであり嫌悪でもあった。『フォルヴェルツ』の新聞委員会は、1914年11月24日、次のような声明を出した。

「ドイツ労働組合総務委員会は、通信紙第47号で、党幹部会、総務委員会、『フォルヴェルツ』編集局の間に生じた内部協定の事件を公にした。現在の事情では、要件は詳らかにのべられないが、次のことだけはお知らせしたい。

総務委員会は、苦情の主要点としてこう述べた。

- 1: 『フォルヴェルツ』は、外国の社会主義政党の攻撃にたいして、ドイツ党の利益を代表すべきである。
- 2: 『フォルヴェルツ』は、蛮行や、負傷者と捕虜の取扱いを報告するさいに、大いに客観性を守るべきである。
- 3: 『フォルヴェルツ』は、社会・経済問題を今まで以上に注意すべきである。
- 4: 『フォルヴェルツ』は、党幹部会が、すでに戦争のはじめの週に全党の新聞にあてた回状で要求したように、ショーヴィニズムと愛国主義、そしてあらゆる併合欲⁽¹⁸⁾に対抗して活動すべきである。」

総務委員会は、以上の4点にたいして主に反対したのである。(第1項は抽象的なので簡単に説明しておこう。セルビアとロシアの社会主義政党を除けば、あらゆる国の社会主義政党は戦争に賛成した。そのため「攻撃」とは戦争に協力せよという意味となり、『フォルヴェルツ』がドイツ党の利益を代表すべき、というのは、彼らの態度・傾向からすれば、戦争に協力しないことを意味する。) こうして『フォルヴェルツ』は、党幹部会と総務委員会によって攻撃されるようになった。

(18) Prager, op. cit., S. 42-43.

第1次世界戦争の軍事的経過について見ておこう。ドイツ軍は、シュリーフェン作戦にしたがって、まず中立国ベルギーとルクセンブルグを侵犯した。8月2日にはルクセンブルグを占拠し、8月4日にベルギーに侵入し、同21日には首都ブリッセルを占領、その後ドイツ軍はパリに進撃を開始した。しかしフランス軍は抵抗を示し、9月5日から9日までヴェルダンーパリ間の平原で大戦闘が行われた。協商国軍はフランス(75個師団)、イギリス(4個師団)、ベルギー(4個師団)、計83個師団で、それに対し、ドイツ軍は96個師団、両軍で200万人がこの会戦に参加した。両軍の勢力は均衡していた。マルヌ河をはさむこの戦闘はドイツの敗北におわった。ドイツ軍が後方(ベルギー)の防衛と、東ヨーロッパ戦線すなわち対ロシア戦線のために、計10個師団をさかねばならなかったからである。参謀総長モルトケが辞任し、ファルケンハイン将軍が任命された。マルヌの敗北は、世界戦争が短期決戦におわらず長期戦となることを示した。ドイツにとって一つの脅威は、東部戦線にあった。フランスがロシアの出陣を要請し、ロシア軍がドイツに進撃したからである。ドイツは、戦略的にみてあまり重要でない戦線へ大兵力をさかねばならなくなった。ロシアの北西方面軍がドイツ軍と東プロイセンで交戦した。ロシアの第1軍は緒戦に勝利したが、東部戦線の新司令官ヒンデنبルクと参謀長ルーデンドルフが機動作戦を用いロシア第2軍を攻撃し、進撃していた2個軍団をタンネンベルグの会戦で破り、ロシア軍は東プロイセンから撃退された。

ロシアの南西戦線では、8月から9月にかけてガリチア作戦が行われた。ここでロシア軍は、オーストリア・ハンガリー軍に勝利した。その後ロシア軍はドイツ侵入を計画したが実現できなかった。

ドイツ軍司令部は1914年末、軍事作戦の変更をした。ロシアを撃破し戦争から離脱すべく東部戦線に作戦を向けた。ヒンデنبルク、ルーデンドルフの策が、彼らの成功を背景として受け入れられたのである。シュリーフェン作戦、すなわち本来のドイツ戦略は転換された。1915年に東ヨーロッパ(ドイツから見れば東部戦線)が主要戦場となった。ロシア軍はドイツとオース

トリア・ハンガリー軍と一進一退の戦闘の末、敗北を喫した。西部戦線は膠着していた。イタリアは、政治・軍事情勢を見ていた。もともとオーストリア・ハンガリーと同盟していたにもかかわらず、それを破棄し、イタリアは協商国側に立つことを決定した。5月23日イタリアは、オーストリア・ハンガリーに宣戦布告した。

戦争が長期消耗戦の様相を呈してきたことから、反戦気分が高まった。西部戦線では、1914年末すでに敵兵と交戦する事件がおきた。1915年ロシア軍の敗北は、ロシア兵士の革命化を醸成した。ドイツ国内では、ストライキが頻発した。帝国議会での最左翼の代弁者K・リープネヒトは、1914年8月3日の戦債承認はやむなく受け入れたが、同年12月2日の再度の戦債投票のさいには敢然と反対した。彼は、R・ルクセンブルグらとともに、反戦団体インテルナチオナーレ・グループを作り、雑誌 *Internationale* (4月14日発行、1号におわる) を出した。この運動は徐々に増大した。

スイスでは、ロシア社会民主党(ボルシェヴィキ)のレーニンが、すでに大戦勃発以来新しい反戦活動を展開していた。彼は、ジノヴィエフとともに、第2インタナショナルと手を切った革命的な国際的運動を結集しようと計った。この試みは、1915年9月5日～8日までのツィンメルワルド会議で、その成功の第一歩を踏んだ。レーニンは、この反戦会議に集った左派を結集することができたのである。レーニンとジノヴィエフは、これらを準備するなかで、帝国主義戦争を内乱に転化せよという条項を含むテーゼをつくりあげていた。

1915年4月⁽¹⁹⁾ごろ、ある日、ヒルファディングはアレクサンダー・シュタインに、「スイスから受けとった1枚の内密の文書を見せた。それは、戦争反対の闘いにおける労働者階級の課題について、レーニン＝ジノヴィエフ・

(19) Alexander Stein, *Rudolf Hilferding und die deutsche Arbeiterbewegung*. Hamburg 1946, S. 9. シュタインは、5月としているが、これは記憶ちがいと思われる。Hilferdingは、すでに *Brief an Luise Kautsky*, 29 IV [19] 15 (International Institut vor Sociale Geschiedenis, Kautsky Archiv KDXII 607) をウィーンから書いている。

グループのテーゼ草案であった。ドイツの〔戦争〕反対派の見解と一致するまったく妥当な一連のテーゼのあとにつづいて、戦争を国際的な市民戦争〔＝内乱〕に転化し、プロレタリアートによって権力を掌握せよ、と宣伝しているくだりがつづいていた。」シュタインがびっくりしてヒルファディングを見ると、彼は皮肉っぽく笑って、こういうものをとくに真面目に受けとる必要はないと、シュタインにわからせた。「この少しあとで、彼は召集されて、イタリア戦線に送られ、そこで戦争の終りまで、伝染病野戦病院で医者として勤務しなければならなかった。⁽²⁰⁾」

3

ヒルファディングが『フォルヴェルツ』編集局員として、ドイツ社会民主党員として、活動したのは、1915年4月までであった。これ以降は、パプスブルク帝国の軍医として従軍した。だから、『フォルヴェルツ』掠奪事件のときに彼はいなかったのである。この事件は、『フォルヴェルツ』の平和主義的路線を非難していた党幹部会が、ついに、同紙の編集陣を強引に解任し、論調を戦争協力に向けさせたものである。1916年11月9日、党幹部会は、フリートリヒ・シュタイプラーを『フォルヴェルツ』編集長に任命した。同紙には、伝統的に編集長なる職はなかった。ひきつづき、左派カール・ライト、アルトゥール・シュタットハーゲン、ハインリヒ・シュトゥレーベルらの編集局員は解任され、エルンスト・ドイミヒ、パウル・ヨーン、アルフレート・ヴィーレップは脱退した⁽²¹⁾（解任された上記3名は、前出の党幹部会あての抗義声明書に署名した人々である）。ヒルファディングもここに留っていれば解任されたであろう。左派は、これで強力な1機関を奪われた。そして彼らは、当然『フォルヴェルツ』を信頼しなくなった。興味深いことは、大衆の反戦気分が増大してゆく傾向にありながら、党幹部会が反対に、中央機関紙を戦争協力の方向へ仕立て上げたことである。

(20) Stein, op. cit.,

(21) Prager, op. cit. S.

ヒルファディングはドイツ国籍を取得していなかったため、オーストリア・ハンガリー帝国の召集を受け、やむなくSPDの戦列を離れた。拒否すれば、監獄ゆきである。おそらく1915年4月ごろ、家族（マルガレーテ夫人、長男カール、次男ピーター）とともにまずウィーンに戻った。⁽²²⁾ 旧一般開業医で、ウィーン大学医学部卒のドクトルである彼に与えられた任務は、軍医であった。

(未完)

(22) Hilferding an Luise Kautsky, op. cit.